

## 自根 金の キューバの呪い ②

# 通りの暗闇に浮かび上がった 「社会主義か死か！」



### ハバナ市ベダード地区ゼロ番地

夜の濃い闇がねっとりとして身体にまとわりついてくる。暗いランウェーの向こうに、低い格納庫のような建物が見えた。飛行機から降りた誰もが歯を食いしばり、こわばった表情で歩いている。

その噂を耳にしたのは前の年の春先のことだった。マイアミから不定期で飛んでいるキューバ行きフライトに、ビザなしの外国人でも乗れるという根拠のない怪しい情報だった。ほとんど「カリブ海の北朝鮮」というイメージでしかなかったキューバは、当時アンデス方面に入り浸っていた自分にはあまり縁のない世界だった。半分は怖いもの見たさ感覚だったが、やはりチェ・ゲバラやカストロの存在は気になっていた。

80年代後半からフジモリ政権が誕生した90年代初頭にかけて、ペルー全土で極左テロ組織、PCP-SL（ペルー共産党センデロ・ルミノソ派）による、血なまぐさいテロの嵐が吹き荒れていた。実際に身の危険を感じることも日常茶飯事、コチェ・ボンバ（自動車爆弾）によるテロ事件に巻き込まれ、危うく命拾いしたことも複数回あった。

物騒だし泥臭いアンデス世界に少し疲れ始めていたある日、カリブ海の島々の取材仕事が舞い込んできた。この際ついでに押し込めればラッキーぐらいの軽い気持ちだったが、思いがけずキューバ取材企画は簡単に通ってしまった。あっけなく、台割りの片隅にこぢんまりとキューバの章が収まることになった。

ニューヨークからマイアミ経由でアイランド・ホッピングの旅をスタート。ジャマイカから小さな島々を飛び歩き、トリニダード・トバゴで着地というコースになる。どんな

景色が待ち受けているのか、足が勝手にリズムを刻みはじめた。

島ごとに言葉もカラーもまったく異なるカリブ海は、紺碧の空間に散らばる綺羅星のようなリズムを産んだ故郷だ。旧英領だったジャマイカはレゲエにスカ。ナポレオンの軍隊を破ってフランスから独立を勝ち取った史上初の黒人奴隷共和国ハイチはコンパとラシーン。スペインの最も古い植民地だったドミニカはメレンゲにボンバ。アメリカの自治州プエルトリコはもちろんサルサ。マルティニークとグアダループはフランスの海外県でズークやビギン。オランダ領アンティール諸島のキュラソーはスリナム起源のカセコかアレケ。英連邦のトリニダード・トバゴはカリブソにソカ、そしてドラム缶の旋律打楽器スティールドラムの故郷だ。

もちろんそのすべての基礎は、黒人奴隷がもたらしたアフリカ起源のリズムだ。地獄の責め苦のごとき日々のなかから生み出された奇跡のような音楽物語が、天空を飛び交う流星群のごとく点在する。人類発祥の地アフリカの人々が本来持っていた生命力が伝えた、始原の大地アフリカの恵みとしか言いようがない。現在、我々が耳にするあらゆるポップスは、この恵み無しには存在し得なかった。強いて言い換えれば、人類史上最大の救いかも知れない。旧宗主国によってそれぞれにキャラが際立つ島々を巡る忙しい取材を、1カ月がかりで終えた。

アイランド・ホッピングの最後に振り出しのマイアミに戻り、キューバへ往復する予定だった。難民フライトと呼ばれているのは、国交がないアメリカ～キューバ間を両国の政治環境が緩んだ時期だけ不定期に結ぶからだ。人道的見地から許可された、65歳以上の元キューバ国籍所持者

の親族訪問専用という名目になっている。

行きがけに予約を申し込んでおいたチャーター便のデスクでチケットを受領。ツーリスト・カードは日本のキューバ領事館で取得済み。ただし、取材目的の場合はプレス申請が必要となる。親族訪問以外は、報道目的のジャーナリストかキューバ政府が招聘した研究者、国際会議などに参加する学者などしか乗れない建前になっている。

アメリカ出国時はジャーナリスト、キューバ入国時は取材ビザがないから観光客、果たして入国できるのか定かではない。

チェックイン・カウンターは大手の航空会社が並ぶターミナルの一番はずれ、フライト4時間前にはもうすでに満員だった。クーラーをフル回転させてもまだ蒸し暑いロビーを、何着も重ね着したお年寄りの集団が埋め尽くしていた。満杯の中国製運ば屋バッグも、キューバの親戚へのお土産だ。とても裕福そうには見えない人々が、表情だけは幸せの頂点といった明るい笑顔を振りまく。見送りの家族と抱き合うその頭の上には、ニューヨーク・ヤンキースなどの安物アポロキャップがいくつも乗せられている。

騒がしかったロビーとは一変して、機内には堅い空気が立ち込めていた。かろうじて残光の輝くカリブ海上空を南下、1時間ほどのフライトでハバナ到着。首都とはとても思えない閑散とした空港だ。押し黙ったまま並ぶ人々の列の後ろについて、薄暗い到着ロビーへ向かう。入国審査のブースは重い扉の個室で、行列から中はうかがえない。窓口から審査官の顔は見えず、手元だけが薄明るい。ブースの後ろ上部には鏡が斜めに取り付けてあり、中から後ろ姿の全身が観察できるようになっている。モスクワ空港のイミグレと完全に同じ構造だ。

精一杯の笑顔を作りながら、パスポートとツーリスト・カード、ホテルの予約証明書を提出。顔を見せない軍服姿の担当官がパスポートを1ページずつめくり、低い声で入国目的を尋ねてくる。観光で〜す、と務めて明るく答えるが、雰囲気は重いまま。背中がじっとり汗ばんでくる。訪問先を聞かれて、ハバナとリゾート地のバラデロ、海がきれいなんでしょ、と言ってみるが反応はない。明らかに私は嫌われていた。いや、私だけではなく、あらゆる外国人観光客は憎まれていた。顔のない審査官はしばらくパスポートをめくり返し、押し黙ったままツーリスト・カードの空欄にスタンプを押した。歪んだ緊張感が急に緩む。プザーが鳴り、ブースの扉の鍵が解錠された。

再度セキュリティ・チェックを受けてようやく到着ロビーに抜けた。30本以上持っていたフィルムがひっかかるが、何とか笑ってごまかす。家族の到着を待ち構えている出迎えの群衆をかき分けて外に出たとたん、同じはずの空気がなぜか急に甘くなった。肌にまとわりつく薄絹の重さの空気。官能的ってことねと、バカみたいになにやけなが

### キューバの友人の皆さん

わずか数時間前に国連総会で行われた封鎖撤廃決議採決の歴史的成果にたいする全キューバ国民の歓喜を皆さんと分かち合えるのを大変嬉しく思います。投票では2年続けて191ヵ国もの国々が我が国に対するこの不正で犯罪的な政策への反対を表明し、今回は米国政府とイスラエル政府が棄権しました。



キューバ外相が指摘したように、国連総会や他の国際会議で彼らとその孤独の票を訂正するのに24年もかかりました。それは米国の孤立と失敗の24年であり、またキューバ国民の英雄的抵抗の58年でした。

歴史的偶然によって、我が国と世界にとって歴史的なこの出来事は、私がこの親愛なる国日本に着任した数日後に起こりました。そのため、このような重要な出来事の際に、初めて皆さんに長年にわたるご支援に感謝するためのご挨拶を送りだせるのを特に嬉しく思います。

昨日得られた結果はキューバ国民だけの勝利ではありません。我が国の尊厳と独立のための長い闘いで私達に寄り添ってくれた世界のすべての国民と政府の勝利でもあります。

この機会に、国連でキューバ外相が行った演説の文言をいくつかお送りいたします。この歴史的成果はキューバ米人間関係正常化に向かう過程のなかで得られたものです。そしてそれは、オバマ大統領が新たにキューバに向けて他の緩和策を発表した数時間後のことでした。それらの緩和策は積極的な性格を持つものではありませんでしたが、封鎖撤廃の目的のうえでは極めて限定的なものでした。

私達は希望、あるいは善意の表明を現実と混同してはなりません。このような問題では、事実からのみ判断することができます。そして事実、キューバに対する経済・貿易・金融封鎖が実施のうえで完全に維持されていることを明らかに示しています。

終わりに当たりまして、この不正な政策の最終的な撤廃まで続く私達の闘いのうえで、引き続き今までも増して皆さんの支援を得られるであろうと確信するものです。

親愛の抱擁をお受けください。

2016年11月 駐日キューバ大使 カルロス・ミゲル・ペレイラ

らザックを担ぎなおした。

暗く静まりかえった帝王ヤシの並木通りがまっすぐに伸びている。誰もいない通りの暗闇に、フィデルとチェ、そしてカミーロ・シエンフエゴスの顔と「SOCIALISMO O MUERTE! (社会主義か死か!）」と記された看板だけが浮かび上がっていた(続く)。

### しらね ぜん

日本で唯一、世界中でも2人しかいないカーニバル評論家、ラテン系写真家。東京出身。青山学院大学卒。仕事(撮影取材調査渉外観察記録編集企画制作など)その他(探検冒険踏破潜入縦断横断登攀釣魚沈没など)さまざまな理由で現地に入り浸っている。人類400万年の旅グレートジャーニーのサポート、コーディネーターも担当。これまでに訪れた国は、6大陸、150カ国超。ラテンアメリカとカリブ海域の主なカーニバルはすべて制覇。定点観測と路上観察を続けているキューバは、1989年以来、30回目の訪問をマークした。

